

## 人文科学研究所創立40周年記念公開講座

### 『旅—人間はどんなたびをしてきたか』<第1回> 奈良・江戸時代の旅を考察

40周年を迎えた人文科学研究所(所長=殿村晋一商学部教授)では、『旅—人間はどんなたびをしてきたか』をテーマに記念公開講座を開講。その第1回講座が11月10日、神田キャンパスで行われた。約130人が来場し、奈良と江戸時代の旅についての2講演に耳を傾けた。

矢野建一教授は「骨送使の旅—古代貴族の湯治と死」と題し、「日本書紀」などに見られる古代の旅人や街道の様子と、小野朝臣老の遺骨を平城京に運んだ「骨送使」の旅について講演した。

小山利彦教授は「出羽路の『芭蕉』—想定外の空間」をテーマにした。松尾芭蕉の代表作「奥の細道」の「出羽の国」の中で、俳句を詠んだ背景や当時の旅の様子をたどった。



第2回公開講座は3月1日(土)、15時から神田キャンパス731号教室で開講される。講師と演題は ▽柘植光彦文学部教授「遠藤周作の旅 フランス・長崎・インド」 ▽大谷正法学部教授「ロシア兵の墓をたずねる旅」。



小山利彦教授



矢野建一教授



▲あいさつする殿村晋一所長

## 会計学研究所講演会

### 租税回避とその否認の限界事例 — 近畿大・ハツ尾教授が講演

会計学研究所(所長=柳裕治商学部教授)主催・日本税理士会連合会寄附講座(コーディネーター=同教授)共催の会計学講演会が、10月23日に生田キャンパスで開催され、学生・院生・教員約200人が聴いた。

講師のハツ尾順一教授=写真=は、税法の研究者・実務家であり、今年度の公認会計士試験委員(租税法)である。納税者が迂回取引や多段階取引等を選択して租税負担を不当に軽減しようとする「租税回避行為」は、節税とも脱税とも異なり、ある意味では自然な行動と言えるが、租税の公平性の視点からは否認されることがある。講演では、不良債権の迂回的な譲渡を題材として、複雑な課税関係を図式化して分かりやすく説明され、租税回避に対する課税庁による否認の難しさと限界について検証した。公認会計士・税理士を目指す学生にとっては大変興味深いテーマであった。



\* ハツ尾順一教授=近畿大学法学部・法科大学院教授、公認会計士・税理士。公認会計士・税理士試験委員歴任。著書は『租税回避の事例研究』『時価課税の規定と事例研究』等多数。

## エクステンションセンター公開講座「文学の森」

### 日本人の笑い—おかしな人たちの系譜— 石黒・高橋・柘植教授が講演

エクステンションセンター公開講座「文学の森」が「日本人の笑い—おかしな人たちの系譜—」を共通テーマに11月10日、生田キャンパスで開かれた。

石黒吉次郎文学部教授は「笑いの伝統—狂言と説話・昔話—」と題し、神話・物語・説話・噺本・落語など伝統的な笑いや当世風の笑い、能・狂言から例をあげて解説。狂言「棒縛」をビデオ上映し、視覚面からの理解を深めた。

高橋龍夫文学部教授は 近代文学の中から「夏目漱石・芥川龍之介の笑い」と題し、漱石の「吾輩は猫である」と芥川の「鼻」の共通点と、互いの「ほくそ笑む関係」を説いた。漱石のスライドも上映され好評を博した。

柘植光彦文学部教授は「井上ひさし・大江健三郎の笑い」と題し、井上氏の民話を聞いて育った体験につながるユーモア小説の名作「ドン松五郎の生活」や、アニメ、漫才のシナリオまでを映像を使って解説し、大江氏については、現在までの履歴と活躍を年譜で紹介し、自嘲的なユーモアあふれる作品が生まれた背景を語った。



石黒吉次郎教授



高橋龍夫教授



柘植光彦教授

## 情報科学研究所講演会

### 「技術者の養成」柱に — 田中克己氏が講演

#### IT産業の再発展に向けて

10月24日、生田キャンパスで情報科学研究所(所長=綿貫理明ネットワーク情報学部教授)の講演会が開かれ全角、日経BP社主任編集委員の田中克己氏(本学ネットワーク情報学部非常勤講師)が「IT産業の再発展に向けて」と題して講演した=写真。

企画責任者の魚田勝臣教授の講師紹介のあと、綿貫所長のあいさつがあり、講演が始まった。

田中氏は、バブルの負の遺産を伴って、日本のITサービス産業が世界水準と比較し、大幅に遅れをとっている問題を多方面からとらえ、日本の大手IT企業の現状や問題点を指摘し、その要因に言及するとともに、この危機を脱出するためには、技術者の養成を柱に企業の技術力向上を早急に図らなければならないと強調した。論説はグラフ・統計資料をもとに詳しく説かれた。

講演の後、学生を中心に、聴講者との間に活発な質疑応答があった。



## 大学院公開講座

### 「英語教育」「公共政策」テーマに

大学院公開講座が10月19日から12月14日まで、神田キャンパスで開催された。前半は「英語教育」、後半は「公共政策」をテーマに掲げ、各講座が展開された。

前半の講座1は「次世代英語教育:今教室で何が起きているのか」が共通テーマ。大学院文学研究科の片桐一彦准教授、ネットワーク情報学部の神白哲史講師、経営学部の中村太一教授が、コンピュータを利用した学習法や教育効果、大学生の意識調査から、変わりつつある英語教育現場を報告した。



▲「道路政策」を語る太田教授

後半・講座2の共通テーマは「現代公共政策の諸側面:政策決定の転換期を迎えて」。大学院商学研究科の川野訓志教授、太田和博教授、手嶋宣之准教授、同経済学研究科の田中隆之教授の4人が「失われた15年」で変化した公共政策に着目。道路、証券、金融などの個別の政策動向を取り上げ、直面している問題点や課題を論じた。

## 商学部・商学研究所公開講座

### チェーンストアと流通イノベーション

商学部・商学研究所主催、日本チェーンストア協会協賛の公開講座「チェーンストアと流通イノベーション」が10月から全5回で行われ、業界を代表する講師が、環境保全や食の安全・安心、経営戦略などを講演。学生を中心に毎回約300人の出席があった。

最終回の11月26日に講演した(株)ライフコーポレーション代表取締役会長兼CEOの清水信次氏は、戦後の混乱から同社を立ち上げた苦勞、さらには業界を取り巻くさまざまな問題と今後の展望までを幅広く語った＝写真。



## 中世西洋写本内覧会開く

プロジェクト「Anglo-Saxon語の継承と変容」を展開している言語・文化研究センターは、「中世西洋写本内覧会」を12月7日、生田キャンパスで開催した＝写真。

展示写本は、中英語の『ポリクロニコン』（『万国史』）、中世の教会で使用された『時禱書』、中世フランス詩の代表作『薔薇物語』など十数点。いずれも専修大学図書館所蔵。訪れた人たちは松下知紀・同センター代表の解説を聴き、彩色画が描かれた写本に見入っていた。



## 学位取得

池本正純経営学部教授＝写真＝が、9月30日付で法政大学から博士(経営学)の学位を授与された。学位論文名は、「企業家とは何か―市場経済と企業家機能―」。



菅原光法学部講師＝写真＝が、10月25日付で東京大学から博士(学術)の学位を授与された。学位論文名は、「西周における法と秩序―秩序観における伝統と近代―」。



## ＜専修人の新しい本＞

### 佐渡の風土と被差別民 —歴史・芸能・進行・金銀山を辿る—

沖浦 和光 編著

川上 隆志 他著

佐渡は、古代から文化交通の十字路として重要な「場」(トポス)であった。06年11月に行われたシンポジウム「佐渡—その歴史・社会・文化」での報告を基にした本書は、佐渡の歴史的風土の特質の中で生きてきた被差別民の歴史に光をあてている。



鉱山開発で江戸幕府の財政的基盤を作り、陸と海の交通路を整備した「大久保長安」を取り上げた共著者の川上氏は編集者時代、さまざまなネットワークを構築してきた。近世初期に独自のネットワークを駆使して、統治機構を整備した大久保の先見性に興味をそそられ「ネットワークの時代」といわれる今こそ、その存在を改めて見直すべきだとしている(現代書館・本体2000円+税)。

共著者(かわかみ・たかし)＝文学部教授。主な担当は出版文化論、日本文化論。岩波書店で雑誌『へるめず』編集長などを歴任。

## 仲川恭司教授の書道作品が切手に

来年の干支・ねずみを題材に、仲川恭司文学部教授ら書家10人が揮毫した字をデザインした切手シートが全国の郵便局で好評発売中だ。

仲川教授の作品＝写真＝は、文字そのものが動物に見えて絵画的。同教授の持ち味であるリズム感のあるダイナミックな大字書とは一味違う愛らしさを持つ。「依頼を受けて10枚出品したが、採用されるのはこれだと思っていた」(仲川教授)という自信作だ。



(写真は見本のため斜線が入っています)

書体は金文(きんぶん)で、「殷周(いんしゅう)革命を伝える金文のね子」による。古銅器に鑄造されていた十二支の子で、漢字の原初に近い古文字を現代風によみがえらせた。

来年1月7日から18日まで東京・千代田区のアートサロン毎日で開かれる「子年干支切手揮毫作家展」(毎日書道会主催)で、同作品のほか数点が展示される予定(土・日休館)。